

遙かなる風雪

実録・柴田音吉洋服店

23

戦時統制経済下——ジレンマに立つ商人魂

昭和11年全社員高野山参拝の記念撮影。中央〇印はまだ学生服姿の柴田高明社長



衣服の歴史はいつの時代にも戦争と切りはなせない。昭和の日本業界もまた戦いのなかで激しい変動を続けていった。

満州事変が片づいたあと、さきの丁字屋をはじめ日本の洋服業界は争ってこの新天地、の需要をまかなおうと勇飛した。

柴田の店からも沢田舜、続いて日井現相談役が渡満した大連を中心にして、満蒙の地には反単位でラシャを買う大きな洋服店が輩出した。

大構想で伸びる満州鉄道の職員はそれらの店の上得意であった。

1937年(昭和12年)7月7日、蘆溝橋で起った一発の銃声は、日本をあの長期戦争の泥沼へとかり立てていった。日華事変の勃発である。繊維資源に乏しい日本は当然衣服規制体制への道を歩み始める。

昭和13年7月、物品販売価格統制規則が施行され、業界はきびしい局面を迎えた。

◎羅紗は1ヤール20円を越すことを得ず。

◎洋服は1着100円を越すことを得ず。

いわゆる物価統制令である。

1ヤール30円のものも20円で売り、130円の洋服は100円に値下げした。

次いで政府は輸出入品等に関する臨時措置法をとった。

毛織物の輸入は全面的に抑制され、これを追って「毛製品・スフ等混用規則」が制定される。

羊毛や羊毛製品の輸入を抑

制することで浮いた資金は、尨大な軍需消耗品の輸入にふり代えられた。

昭和13年末の毛糸生産量は6割休産にまで下落、戦時体制は強化されていく。

× ×

毛織物は次第に貴重品になっていった。

売り手、買い手の表情は一変した。客の方が「売って頂けませんか」という風潮である。

切売もテーラーも店頭は一見活気に満ちた様相を呈してはいても、所せんロウソクの消える前の一瞬の明るみであることを誰もが知っていた。

統制令下、柴田音吉商店からは3人の商品査定委員が出た。管内の各切売商が申請する手持商品を査定、値段をつけるのが仕事である。

査定といってもひどいものである。色柄品質一切お構いなし、5cm角に切ったラシャを秤にかけて、目方で決める。こうした場合の役所命令とはいつの時代にもその程度のものであるらしい。

ピュア・ウールの英国製品などストックされていた高級毛織物ほど軽く、従って値は安くつけられた。スフの混紡度が高いほど重く、高価になるという珍現象である。国産毛織物のステープルファイヤ混紡率は2割から5割、6割へと多くなっていった。

× ×

目方でつけられた毛織物の値段は表向きのもので、そんな値段で売れる店はまずなかったといっている。ヤミ、行為は横行した。

柴田からは査定委員も出していたし、3代目を継いだ高明社長は若く清廉だった。

ヤミは一切しないようにと社員はいい含められる。

ただ、乏しくなってきた商品を従来の上得意に割当て販売することだけが、客に報い得る精一杯の誠意であった。

警察当局は横行するヤミ行為を狙って見せしめ、の摘発先を物色していた。

柴田にも参考書類持参で来署せよという命令が来た。

当時27才、血気さかんだった石垣青年は署長室に陣どりタンカを切った。「柴田に限りヤミはやらない。白羽の矢の立て先を間違えたんじゃないか。どこからでもつきに来てくれ。」

暗い時代であった。政府は企業合同、もしくは軍需産業への転業を企業整備令下強力に勧めていた。

ヤミはやりたくない、スフ入りのものは毛織物ともいえない商品は扱いたくない、かといって軍需産業に協力もしたくない。そんな重いジレンマの中で、柴田の店は一時廃業への方針を固めて行った。

兵庫県庁筋はこのことを知って再三廃業はしないで欲しいと要請してきた。伝統ある柴田の店が、例え国家方針であろうと廃業に至るのは「人心に与える影響が大」だというのがその論旨だった。

にも拘らず廃業へとその方針を固持した理由は、商人の良心、以外の何ものでもなかったと、残存する人びとは淡々と述懐する。(つづく)

岡 和子記者